
魔法先生ネギま!～Night time～

西瓜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ ～Night time～

【Nコード】

N0909X

【作者名】

西瓜

【あらすじ】

テンプレ的な転生で魂を鍛えることになった主人公。目が覚めたらすでに人外でした。・・・なにこれこわい。――己を貫き通す物語。魔法先生ネギま！ ～Night time～ はじまります。この物語はオリ主最強、原作崩壊、ご都合主義、独自設定、アンチ要素などが入っています。厨二的要素満載なので、苦手な方は即刻戻る推奨。駄文注意！

プロローグ（前書き）

処女作です。試行錯誤でやっていくので生ぬるい目で見て行ってね！
駄文ご覚悟！

プロローグ

目が覚めるとそこは真っ白い空間でした――。

・・・とりあえず一言。

「知らない天井だ。」

と呟いた瞬間パツッと目の前が光り輝き、
目を開いてみると、そこには明らかに私は偉いですよ的な空気を醸
しだす変なじ「変とは何じゃ！変とは！」・・・変なじいさんが目
の前にいた。

「無視か！無視なのか！？わし泣いちゃうぞ。」

「泣いちゃうぞ（笑）。気持ち悪いおじいちゃんですね。ってあれ
？普通に心読まれてね？」

「そりゃあ心ぐらい読めるわい。神じゃもん（ドヤツ）」

めっさドヤ顔されたんだけどこれどうすればいいんだろうか。

「もうちょつと驚いてくれても良いじゃろう!？」

なんでそんなに冷静なんじゃ!とかブツブツいいながら頭抱えて神(?)が一名。

状況がわかってない俺↑

——とりあえず説明キボヌ。

——閑話休題——

「——つとまあこんな感じじゃな。」

テンプレ(笑)で死亡

マジサーセンww

能力もらって転生↑いまここ。

つとまあ、はしょったけど簡単にいうと

このじいさん実は最高神辺りの位らしくそれでたまたま人らしからぬ力?を持った俺が

部下のミスで死亡。力？を持っていたから元の世界の輪廻転生の環から弾かれる。

それで部下のミスだからじいさん自ら出陣。

元の世界には戻せないけど違う世界に転生できるよ！でどうする？って感じ。

「おぬしがもつとる力っていうのは、まあ魂の大きさがただ単に大きいってだけじゃ。

そのままでは意味がないものじゃな。」

魂の大きさ？あれか？許容量が大きいとか？

「まあ概ね合っていないこともないかのお。おぬしがこの状態でも落ち着いておられるのも魂の許容量が大きいというのものもあるの。」

ちなみにどれぐらい大きいのか？一般人と比べて

「ふむ、わしも驚いたがの、おぬしは今の状態でも下級神ぐらいの魂の質じゃ。」

・・・つまりどういうことだっばよ？

「魂を鍛えればおぬしは神にもなれるということじゃよ。つまり人が・・・ん？まてよ・・・？」

途中で手を顎にそえて何かを考えるじいさん。

そうか、神様か。・・・ははっ、ご冗談を。

「そうじゃ!! おぬし神にして部下にするかの!」

急に大声出すなよびっくりするだろ・・・。

・・・

・・・

・・・って神に部下あ!?

「よし、そうしようかの! まずは適当な世界で魂を鍛えてもらうかの! ウツハ! ワクワクしてきたWWW」

ちよw拒否権とかないんすかww

「いく世界は、『魔法先生ネギま!』という世界じゃ! おぬしが入ることにより物語は変わってくるじゃろうが、そこはパラレルワールドみたいなものじゃから気にするでないぞ。」

『魔法先生ネギま!』一応マガジンで読んでいたが、魔法とか気と

かあって結構危ないか？一般ピープルな俺がいつでも一瞬で消し炭だぞおい。

「そのところは考えとるわい。チートで最強オリ主でもやってこい！能力の方はこっちが決めとくからの！」

え？結局行く前提の話なんですかこれ？しまった！泥沼にはまってしまった！

・・・仕方ない腹括るか。

「準備はよいかの？魂はおぬしがそっちの世界ががんばっておれば勝手に純度が上がっていくじゃろうて。まあ第二の人生と思って生きていきなされ。」

「じいさん。

・・・行くのは構わないが・・・別に原作ブレイクしてしまっても構わないのだろう？」

「じゃあの」

じいさんの言葉とともに俺の足がついていた場所。立っていた場所に穴が開いた。
って最後の最後でテンプレだとっ!?

「何でさあああああああああああああ———」

「さてっと、能力は何にしようかのう？不老は基本じゃろ？ほかに
は・・・」

楽しそうにブツブツと考えながら神は真っ白い空間から消え去った。

1夜

チート転生始まるよー！ (前書き)

主人公、能力確認するの巻。
ガチチートです。

1夜

チート転生始まるよー！

目が覚めるとそこは、森の中だった――。

・・・テンプレ乙。

とりあえず起き上がりながら、辺りを見回す。

辺りは真っ暗でどうやら真夜中のようなだ。じいさんの配慮だろうか、焚き火が近くで燃えている。

焚き火の近くに手紙らしきものが置いてあった。

「ふむ、じいさんが置いていっ「お、目が覚めたようじゃのう」うおっ!？」

手紙に触れた瞬間に手紙が動き出し、某魔法使い映画の手紙のように話し始めた。

「おぬしが起きたら能力のことについて話そうと思ってな、ほっほっほ、ちよっとした茶目っ気じゃよ。」

・・・この手紙破り捨ててやろうかこのやろう。辺り真っ暗でビク

ビクしてるってのに。

「まあまあ、落ち着こうの？今日は満月じゃから力が湧いてきたりせんか？」

ん？そいえばなんか力が溢れ出てくる感じがするようないような・・・。

・・・なんぞこれ？

「ほっほっほ、チート能力その1じゃ。日の光とかの弱点なしの吸血鬼化。しかも不老不死だよ、やったね！」

おいばかやめろ「っておいしい！思いっきり人外じゃねえか！なにさらしとんじゃわれえ！」

「夜に加えて満月じゃから力が湧いてでとるわけじゃ。じゃあほかの能力についても色々説明していくかの。」

「なんだ、吸血鬼ってだけでしかも不老不死だし、十分強いだろうにほかにも能力があるのか？」

「だって、これだけじゃあつまらんど。どうせならすっごいチートで固めた方が楽しいのじゃ。」

まあやるならやるでガチチートにしてもいいんだがな。いまさら能力増やしてもチートには変わらんだろうし。

「能力その2、魔力および気のチート化じゃ。このネギまの世界でいうと魔力は近衛木乃香の10倍、気はジャック・ラカンの10倍程度じゃ。魔力や気の運用方法についても頭に粗方入っている状態じゃ。魔法も然り。」

まあここはよくあるチートだな。運用方法については助かるな。力を持ってても使い方がわからないんじゃないだろうもないしな。

「能力その3じゃ！全ての上限をなくすこと。修行しても底が見えない。どこまでも上がり続けるってところじゃ。」

これもどこかできいたことあるようなチートだな。それにしてもこの神、ノリノリである。

「能力その4！ラストじゃが、これはおぬしの記憶のゲームやアニメを探して決めたんじゃない！」

Dies iraeってゲームが生前好きじゃったようじゃからこのゲームに出てきた聖遺物全てじゃ。

そのためにこのゲームの主人公の『聖遺物を操るための聖遺物』という特性をおぬしに持ってきておるからの。聖遺物を壊されてもおぬしは死にはしないから安心せい。」

聖遺物を扱うために必要なエイヴィヒカイトはおぬしに刻みこんど
るから扱えるはずじゃ

——じいさん

・・・いや神様！今はじめて尊敬した！うおおお！あの厨二的な技
が使えるだと！？形成や創造が俺の手で発動できるだと！？

こ　う　ふ　ん　し　て　き　た　あ　！　！

——閑話休題——

「はあはあ・・・」

「だ、大丈夫かの・・・？」

「つ、つい興奮してしまった。は、話を戻してくれ。」

「ま、まあおぬしの魂の質は極上じゃから、聖遺物を扱う面では大丈夫じゃろう。まだ馴染んでおらんからまだでてこれんが意志疎通ぐらいできるような娘はしとくわい。まあサービスじゃ。」

さすがの神様。太っ腹である。

さすがに話し相手がいないのは辛いわ。

「つと、ところで神様。いつなんだ？」

原作始まるちょっと前か？それとも大戦前かな？

「お？いっておらんかったか。原作から1000年前じゃよ。」

へ？

「前すぎじゃあああああ！……！！原作まで何年またせるんだごらあああああ！」

「ちょ、落ち着かんか！ちょ、あ、やめ、アッーーーーー！」

「と、とりあえずじゃ、修行時間はたっぷり設けとるからがんばるんじゃぞ！力があっても修行を怠れば強くはなれんからの。」

「はあはあ、わ、わかつとるわこの糞じじい。」

一瞬でも尊敬した俺が馬鹿だった。こんなやつ糞じじいで十分じゃ。

「おぬしはこの世界で自分の信じる道を進めい。おぬしの魂を鍛えることにもつながるはずじゃ。」

ではな、第二の人生楽しんでこい！」

最後に真面目な口調でいう神。
まあ、なんだ・・・

「俺なりにがんばるぜ。まあまた会おうぜ。・・・ありがとな。」

俺が言い切るとじいさんの笑い声とともに手紙に火がつきあつという間に燃え尽きた。

さてと・・・

「これからどうしようかねえ・・・」

俺の呟きは夜風とともに夜の森の中に消えていった。

1夜

チート転生始まるよー！（後書き）

能力についてわからないことがあったりしたら、
独自解釈で進めちゃうかもしれません。ご了承ください。

2夜 キングクリムゾン! (前書き)

早速時間が飛びます。
お約束です。

2夜 キングクリムゾン！

転生してから、400年ぐらいたった。
お約束のキンクリだよ！悪かったね！

とりあえず400年ぐらい何をしてたかっていうとやっぱり修行な
わけで。

淡々と400年も修行風景見させられても・・・ねえ？
そんなこんなで400年たったのさ！

どうやら転生した時にいた場所はヨーロッパ辺りらしい。
らしいっていうのは実際に確認はしてないから。

森から出たところの村の人の格好がそれっぽかったのでそう判断し
た。

まあ速攻で森の中に戻ったけど。

理由は単純で俺がもう人間ではないからってこと。
最初はいいかもしれないけど何年も姿変わらなかつたら化物扱いさ
れるだろう。

そんなこんなで転生したときの森ですつと修行してたのさ。

修行してて気がついたんだけどやっぱりなんていうか体のつくりが根本的にちがうのだろう。

力の制御に苦労した。ちよつと力を入れるだけで木が倒れたりは普通だ。

力の制御は10年ぐらいで完璧に。それからは魔力と気の扱い方の練習をした。

どうやら気はともかく魔力の方はあんまり才能がなかったようで制御に時間がかかった。

それからは魔法を実践レベルで使えるように最初は詠唱ありから、無詠唱とどんどん難易度を上げていき、今ではナギも裸足で逃げ出すような威力に。

ちなみに俺の得意属性は

闇Ⅱ影＞氷＞炎＞＞雷＞＞風＞＞＞水＞＞〔超えられない壁〕＞＞
光だ。

・・・なんとまあ吸血鬼っぽい感じで。

水についてはできないことはないけど威力は全然。光についてはお手上げ状態。

まあ種族的にも、性格的にも闇方面だと自負してるから別に気にしてない。気にしてないし！

なんで威力がわかったのかっていうと、

森の中に人間が入ってきてたまたま俺と鉢合わせ。

なにやら魔法使いだったらしく攻撃してきたので”魔法の射手”で応戦したらひどい有様に。

どうやら初実践だったので魔力籠めすぎてたらしく吹っ飛んだ。そりゃあもう血みどろに。

敵対行動をしてきたので普通に放置してきた。

・・・まあ自業自得だろう。それにしてもなんで急に襲ってきたのか謎。

そんなことがあったのが転生してから200年ぐらいたった時だったかな。

それからは魔法はそこそこにして、聖遺物について色々やってた。そいえばじいさんが早く馴染ませてくれる的なことをいつてたからそろそろかなと思って、

”罪姫・正義の柱”マルグリット・ボワ・ジュステイスに語りかけてみる。

案の定反応があった。

皆大好きマルグリット・ブルーユこと、マリイさんです！

話し相手が増えるよ、やったね！

どうやらまだ魂の具現化はできないらしい。なんでも完璧に俺の魂に馴染んでないんだとか。

・・・結構時間かかるな。

マリイも無事に確認できたことだし、聖遺物について修行しますか。

———んで今に至る。

聖遺物についてはやはりなかなかできないようで、とりあえず形成状態までは出せるようになった。

もちろん全部の聖遺物だ。その中でも次の位階に進んでるのが2つ。

23

言わずもがな、俺たちの相棒マリイこと”罪姫・正義の柱”と
マルグリット・ボワ・ジュステイス

”闇の賜物”だ。
クリフォート・バチカル

闇の賜物はヴラド・ツェペシュの結晶化した血液を素体した聖遺物だから、吸血鬼の俺とは相性が良かったのかもしれない。

それで最近森の中に入ってくる魔法使い（バカ）共の相手ばかり

している。

何でか知らないけど俺の噂を聞きつけて俺を退治しにきたらしい。
迷惑甚だしいやつらだな。あの信者どもは。

（――大丈夫？夜。）

どうやらマリィに心配をかけたらしい。・・・バカ共め、許すまじ。

（――ゆるすまじー。）

ああ、癒される。

おっと、そいえばまだ名前を教えてなかったな。

夜っていうのは転生前の名前で

今は、アタナシオンサニティ ナイト・A・I・アルカード って名乗ってる。

ナイトはそのまま夜から。

アタナシアは不滅とか不死って意味。

インサニティは狂気。

アルカードはドラキュラつまり吸血鬼。

――厨二乙。まあ元が漫画の世界だしいいじゃないか！

——閑話休題——

——ガサガサッ

「ん？………どうやらおいでなすったようだな。———しかしこの匂いは……」

複数の足音と草を掻き分ける音が聞こえてくる。

ナイトは少し考えるそぶりを見せた後、ニヤリと三日月のような笑みをし、

足音の方向に向かって跳躍する。

「ああ、今宵も月がきれいだな。——夜の時間のはじまりだ。」

空には三日月。それはそれは大きな三日月が真っ暗な森の中を照らしていた。

2夜 キングクリムゾン！(後書き)

原作キャラを早く出したかったので
キンクリでした。仕方ないね。

次回は原作キャラです。

誰かは察していただけでしょう。

3夜・金髪幼女をつかまえた！（前書き）

聖遺物について

人間の思念、魂を吸収することにより自らの意思を持ち、絶大な力を持つようになった物。聖遺物を扱うにはエイヴィヒカイトという理論が必要。これには、階位が存在し、階位が上がるごとに戦闘能力が飛躍的に増大する。弱い順に活動・形成・創造・流出となる。創造からは詠唱が必要。

活動…初期段階。限定的に聖遺物の特性を使用できる。

形成…聖遺物を具現化できる。

創造…使い手の魂に刻まれた渴望をルールにした、己と己の聖遺物にとつてのみ都合のいい異界を創り出す、切り札、必殺技。

流出…エイヴィヒカイトの最上位階。創造の異界とそのルールを永続的かつ全世界に流れ出させ、既存の世界法則を塗り替える。つまりはチート。本編ではたぶん出番はないであろう。

とりあえず簡単に説明しました。詳しくはwikiを。

3夜 金髪幼女をつかまえた！

???

Side

「——はあはあっ・・・」

息も切れ切れに、だが足は止まることはなく真っ暗な森の中を走り続ける。

幸いにもこの目は暗闇でも機能するようで密集する木々を掻い潜り只管走り続ける。

「——はあはあ——いたぞっ！！逃がすかつ、この魔女め！」
「っ！！」

すぐ後ろの方から罵声とともに草木を掻き分ける音が聞こえる。

——どうしてこんなことになったのだろうか。——私が何かしただろうか。

心の中でどうして？と疑問を出す。

しかし疑問に答えてくれるものは居らず後ろからの声がどんどん近くなっていく。

密集する木々を抜け、少しひらけた広場のような場所へとでる。

「——うっ!？」

ずっと走り続けていたからだろうか、ズテンっ!という音とともについにこけてしまった。

——まずいつ、まずいつ!!

早く立たないと体を起こそうとするが体がいうことをきいてくれない。

体に力が入らない。どうして? どうして私がこんな目に・・・。

「追い詰めたぞ! この魔女めっ! 観念しろ!」

その言葉とともに私を取り囲む数人の大人。未だにうまく力が入らずに顔だけを向け相手を見る。
ローブを着け、手には棒のようなもの。その姿はまさしく”魔法使い”のものであった。

「とうとう追い詰めたぞっ！我々、”正義の魔法使い”が貴様を退治する。大人しくしておれ！」

——絶体絶命。

杖を上に掲げ、何かを口ずさむ。それはまさに詠唱。呪文が唱えられ、不可思議な力が杖に集まる。
この不可思議な力が私を蹂躪し、殺すのであろう。

——いやだ・・・どうして・・・どうして私が！？

頭の中で早くそこから逃げろと警報が鳴り響く。しかし力が入らずに動くことができない。

——もうだめだっ！

——万事休す。

——あきらめかけたそのときだった。

「珍しい臭いがしたからきてみれば・・・なんだ、面白いことをしてるじゃないか。」

月夜に煌く、白銀の髪。真っ赤な血のような真紅の瞳。
三日月のような狂気の笑み。

「俺も混ぜろよ、”正義の魔法使い”。」

——ナイト・A・I・アルカードとの初めての出会いだった。

ナイト Side

「なにものだっ貴様！我々の邪魔をするなっ。」

そういつて喚き散らす正義の魔法使い（バカ）共。
詠唱を中断しこちらに敵意むき出しである。まったくもって怖くも
なんともないが。

「そんな小さな子供を囲って優越感に浸ってんのか？面白い連中だ
な。」

俺の一言で、顔真っ赤になるバカ共。沸点低すぎだろ。カルシウム
取れカルシウム。

「き、き、キサマア！我が下手にでておればいい気になりおって！キサマも排除してくれる！」

そういつて詠唱をはじめ。それにしても悠長に敵の前で詠唱して
るバカ共。魔力の練りも全然ダメ。
さて、さっさと終わらせようか。

——マリイ、準備よろしく。

（——あいあいさー。）

「——魔法の射手！連弾・光の7矢！！」

「——魔法の射手！連弾・雷の7矢！！」

「——魔法の射手！連弾・炎の7矢！！」

「あ、あぶないっ！！——」

さっきまで倒れていた少女が叫ぶも放たれた”魔法の射手”はナイ
トに向かって進む。

普通の人間ならば当たればただではすまないだろう力。——”普通

の人間”の話ならば。

「――・・・ハッ！」

ナイトが手を前にかざす。すると幾何学的な模様、魔方陣が現れる。
”魔法の射手”はその魔方陣―障壁に当たると、火花を散らし飛散していった。

「――なっ！？ば、馬鹿な！この量の魔法がた、ただの障壁のみでっ！？」

魔法使いたちの顔が驚愕に染まる。しだいに顔色の悪くなっていく魔法使いたち。

「貴様らは俺の領域テリトリーに無断で侵入したんだ、それなりの覚悟はできてるんだろぅな？」

「ま、ま、まさか・・・お前はこの辺りで有名な吸血鬼かっ！？」

仲間の一人の言葉をきいて一気に顔色が悪くなっていく。
それを見てニヤリと笑うナイト。その笑みはまさしく人外のそれである。

それを見て恐怖が増す魔法使いたち。

——マリイ、やるぞ。

(——うん！)

「お前たちの敗因は一つ。——俺に会ったことだ。」

——形成 (Yetzirah)

罪姫・正義の柱

マルグリット・ボワ・ジュステイス

右腕が赤い紋様の刻まれた長大な黒いギロチンに変化する。マリイの魂を宿したギロチン。俺の相棒。

このギロチンは強い必殺性を持っているため、不死者とも言えども首を刎ねられると滅びてしまう。

右腕を振るうごとに一人、また一人と命を刈り取っていく。誰も逃げることに許さず全てを聖遺物の糧にしていく。

「——ひ、ひい！？ ゆ、ゆる「さよならだ。」——ザシユッ

慈悲もなし。最後の一人の首を跳ねる。

ドチャリッと赤い海に崩れ落ちるように倒れる。

「・・・終わったか。マリィおいしかったか？」

（――・・・まずい――）

どうやらお気に召さなかったようだ。どこからどう見ても良質な魂ではなさそうだったが。
さてと・・・

「掃除は終わったが、大丈夫かその幼女。」

「・・・うつ・・・あ、ありがとう・・・ございま・・・す。」

「何、心配するな。同属のような気がしたのでな。まあ気まぐれだ。」

人生初の吸血鬼仲間だ、お節介、いいじゃないか。うん。

べ、べつに幼女だからたすけたってわけじゃないんだからねっ！

（―――だからねっ！――）

マリィは癒し。

「あ、あの・・・お名前は・・・？」

上目遣いでこちらを伺いながら聞いてくる金髪少女。
あら、かわいい。

「ナイト・A・I・アルカード。400年ぐらい前からこの森に住
んでる吸血鬼だ、よろしく。」

「よ、400年！？す、すごい・・・」

よせやい、照れるだろう・・・。

金髪少女は何か考えているようだ。

それにしてもこの血の海どうしようか。

処理とかめんどくさいな。放置すると臭いし、そろそろこの森で
もいいんじゃないか。

「あ、あのっ！ナイトさんは魔法使えるんですよね？」

「ナイトでいい、まあ使えるといえば使えるが・・・」

使えるけど魔法より断然気とか聖遺物のほうが得意なんだけどね。
肉弾戦の方が得意だし。

「あ、あの、そ、その・・・（モジモジ）」

モジモジと手を遊ばせる金髪少女。なにこれ、かわいいんだけど。
チラチラとこつちをみては顔を背ける少女。
あーなるほど。

「・・・一緒にくるか？吸血鬼になって間もないのだろう？」

「え？い、いいんですか・・・？」

「同属にあったのは初めてだからな、ちょっと親切になっても問題はないだろう。」

それに見てられないし。

「？なにかいいました？」

「いや、なんでもない。どうする？一緒にくるなら命の安全は保障しよう。それに生きる術も教えよう。」

「お、おねがいします！」

「了解した。・・・そいえば名前は？あるのだろう？」

「あ、エヴァンジェリン・マグタウエルです。これからよろしくお
願います!」

うれしそうにニツコリと笑う金髪幼女。もといエヴァンジェリン。

――・・・原作キャラやないか。

3夜、金髪少女をつかまえた！（後書き）

原作キャラ、金髪少女もといエヴァちゃんです！設定では、吸血鬼になって3〜4年。

次回は修行回かな？

4夜 金髪幼女と一緒！

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！氷の精霊42頭 集い来たりて敵を切り裂け 魔法の射手 連弾・氷の42矢！！」

素早く詠唱を完了させ、氷の矢で牽制をするエヴァ。それを素早く見極め無駄の少ない動作で回避する。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！来たれ氷精 爆ぜよ風精 氷爆！！」

間髪いれず次の詠唱に入るエヴァ。近くの地面が凍りつき爆発する。それをジャンプで回避する。

「――闇に従え 吹雪け 常夜の氷雪！ 闇の吹雪！！！」

が、それを見越して詠唱を完了させていたエヴァが闇の吹雪を放つ。空中で身動きが取れない状態。避けることができずに闇の吹雪に飲

まれる。

「や、やった!？」

グッとガッツポーズを取るエヴァ。

余程ナイトに当たったのがうれしかったのだろう。

―だが戦闘中に油断は命取りである。

「――・・・なかなかいいコンボだったぞ、エヴァ。油断してたわ。」

びくっと声がしてきたほうを向くと案の定無傷の状態のナイトが。
その手には先ほどまで握られていなかった、稲妻を彷彿とさせる独特の刀身をした剣が。

その刀身は電気を帯びているようでバチバチつと音を鳴らしている。

スルーズ・ワルキューレ
―――”戦雷の聖剣”

伝説通りの神話の武器ではないが、フリードリヒ3世の宝として保管されていた

高い霊格の聖遺物。能力は”電撃を操る”こと。

「さすがに魔力も気も使わずにっていう縛りはキツすぎたか。．．．だが、今は戦闘中だぜ？油断するのはいただけないな。」

さきほどもでの戦闘、ナイトは魔力も気も一切使わずにエヴァの魔法をかわしていたのだ。

―さすがの吸血鬼ボディ、チートである。

対するエヴァはナイトの言葉を聞いてから顔が真っ青だ。

「――私が犯した罪は

――War es so schm?hlich,

心からの信頼において あなたの命に反したこと

ihm innig vertraut-trotzt, ich
deinem Gebot.

私は愚かで あなたのお役に立てなかった

Wohl taugte dir nicht die t?r-
ge Maid,

だからあなたの炎で包んでほしい

Auf dein Gebot entbrenne ein Feuer;

我が槍を恐れるならば この炎を越すこと許さぬ」

Wer meines Speeres Spitze für
chtet, durchschreite das Feuer
nie

「創造（Briah）

雷速剣舞・戦姫変生！
トール・トールテンタンツ・ヴァルキュリア

——バチバチッ！！！！！！！

詠唱が完了したその時、ナイトの体から雷が迸る。

——雷速剣舞・戦姫変生。
トール・トールテンタンツ・ヴァルキュリア

「同胞たちが道を見失わないよう、戦場を照らす閃光になりたい」

という渴望のルールを具現化した求道型の創造。その能力は
”自分自身を雷へ変化させる”こと。

「——さあてえ、お仕置きの時間だ。」

——バチンッ！！！！！！！！！

一瞬でエヴァの眼前から消え去る。今のナイトは雷自身、その速さは半端ではない。

そのままエヴァの後ろをとり”戦雷の聖剣”できりつける。

が、エヴァも伊達に人外はやってない。

後ろからの気配を察知しすぐさま跳躍し、回避する。

「ハハハ、いいぞ！今のを良く避けたな！」

「そ、それ卑怯！だよ！」

会話をしながらも斬撃は止むことはない。

只管に回避するエヴァ。しかし剣を振るうたびに雷撃がエヴァを襲い傷をつくっていく。

「くう！（このままだとジリ貧だ。それなら――）

攻める！！！」

エクスキューションソードを発動し、ナイトを迎え撃つ。

——いい判断だが、そりゃあ悪手だぜ？

エヴァのエクスキューションソードがナイトの戦雷の聖剣に触れた瞬間にバチツと音がし、
エクスキューションソードが空を切る。

「・・・えっ!? ———あばばばばばばばばばば!?!???

突然のことで呆然とするエヴァ。その一瞬が命取り。
雷化しているナイトに捕まれ電撃の餌食になる。

ぷすぷすつと音を立ててバタリとその場に倒れ込む。
電撃で真っ黒になり綺麗な顔が台無しである。

不老不死であるが、電撃の痺れ等はある程度利くようだ。生半可な
電撃は利かないが。

「ほい、俺の勝ちつと。」

ニヤニヤと笑みを作り倒れてるエヴァツンツンと突きながら宣言する。

「ひよれ、ずるひ・・・」

「ぷ、はははは！まあ精進しろや！」

傷は回復したがまだ痺れが取れないのか呂律が回ってないエヴァ。
なにこれ癒し。

（――むー！）

もちろんマリイも。

（――えへへ・・・）

ああ、かわいい

かわいい

かわいい。

「聖遺物ずるい！雷化なんて卑怯だよ！」

金髪幼女ことエヴァがプンプンと可愛らしく怒る。

「ていっても、魔力も気も縛ってたんだぜ？まあ聖遺物を出させたんだ。成長したよ。」

そういうながらエヴァの頭を撫でてやる。

金髪の長い髪がサラサラしていて気持ちがいい。

えへへーとか言っちゃってるエヴァちゃんまじ天使。

エヴァと一緒に旅を始めて早400年ぐらい。

あれからあの森から出て旅をしながらエヴァの修行をしていた。

俺が教えてやれることは（魔法に関しては）全て教えてやれたと思う。

300年ぐらいからずっと魔法世界に移動して修行をしていた。観光しながら。

俺以外の相手とも戦った方がいいとも思ったからだ。まあ襲ってきた盗賊やらとは戦ったりしたけど

本格的な実践とかはしたことがなかったから魔法世界はちょうどよかったわけだ。

んで色々と暴れてたらついちゃいましたよ二つ名！

エヴァは原作通り、” 闇の福音”、” 不死の魔法使い” 等。まだ人形使いのスキルは使っていないからそういった二つ名はついてないみたいだ。

んで俺の方かというと、” 夜の闇”、” 不滅の狂気”、” 吸血鬼” などなど。

厨二全開な二つ名で俺は満足だ！

「——というわけでそろそろ住居構えてもいいんじゃない？ っと思ってきたんで旧世界戻るぞー」

「ナイトとあってから400年も経ったんだね・・・早いなあ。——ところで次はどこにいくの？」

「ついてからのお楽しみだ。」

ニヤリといたずらっ子のような笑みを浮かべて先を歩く。
その背を愛おしそうに見つめ、ハッと我に返って追いかけるエヴァ。

――さあて、忙しくなるぞ。

4夜、金髪幼女と一緒！（後書き）

エヴァと修行。

主人公のチートっぷりがひどいね。だがそれがいい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0909x/>

魔法先生ネギま!～Night time～

2011年11月15日17時38分発行